

出品作品リスト

スイス プチ・パレ 美術館展 フランス近代 絵画の贈り物

2021.7.23 fri - 9.5 sun
鹿児島市立美術館

- ★ リストは作家の生没年順です。展示順とは異なりますのでご了承ください。
- ★ 会場内の混雑緩和のため、章パネルの原稿を転載しています。お手元でゆっくりお読みいただけましたら幸いです。
- ★ 本展のチケットで2階の所蔵品展もご覧いただけます。(所蔵品展の中で、特集:没後100年 橋口五葉を開催中です。)

展示室内では、下記についてご協力ください。

- ・メモをとる場合は、鉛筆をご利用ください。また、作品は撮影禁止です。
- ・飲食物や傘の持込、通話、音の出る機器の使用はお控えください。
- ・マスクを着用するなど咳エチケットを守り、人がたくさんいる場所での大きな声での会話はお控えください。
- ・他のお客様との間に十分な距離(2m程度)をお取りください。
- ・会場内の密を避けるため入場制限を行う場合があります。係員の誘導に従い安全にご観覧ください。

ごあいさつ

スイス プチ・パレ美術館は、事業で財を成したオスカー・ゲーズ氏が、19世紀後半から20世紀初頭のフランス近代絵画を核として収集したコレクションを一般に公開するため、1968年にスイスのジュネーブ旧市街に開館しました。また、「芸術は国境のない世界共通の言語」であると考えたゲーズ氏は、国内外の美術展に積極的なコレクションの出品協力を惜しみませんでした。ゲーズ氏が没した1998年から現在にいたるまで、同館は休館していますが、その遺志は引き継がれ、このたび日本で約30年ぶりに主要作品を展示することになりました。

19世紀のフランスでは、産業革命を経て都市の近代化が進みました。また、自然科学の発展は芸術の分野における様々な様式の出現を促しました。光と色彩を追求する印象派の画家が登場した後、1880年代からは新印象派やナビ派が、印象派を超える芸術の在り方を模索し、さらにそれらがフォーヴィスム、キュビスムに代表される20世紀美術の潮流へと結びついていきます。

本展では、スイス プチ・パレ美術館の主要コレクションのうち、印象派からブルターニュ地方を創作の舞台としたポン=タヴァン派、セリュジエやドニらが結成したナビ派、フォーヴィスム、キュビスム、エコール・ド・パリの画家たちまで、約半世紀のうちに現れた個性豊かな画家たちによる多彩な絵画様式の作品をご紹介します。本展が、皆様にとって新しい発見の機会となり、楽しみながら絵画をご鑑賞いただくことのできる場所となれば幸いです。展覧会開催にあたり、貴重なコレクションをご出品いただきましたスイス プチ・パレ美術館、また、ご後援、ご協力を賜りました関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

主催者

1. 印象派

19世紀末の四半世紀に、官展(サロン)の絵画を拒絶した若き画家たちは、日常生活に基づく主題を選んで、屋外で描こうとした。1874年、彼らは最初の展覧会を開催するため、パリの写真家ナダールのアトリエに集った。そこにはモネの《印象、日の出》が展示されていたが、美術評論家のルロワはこう皮肉った。「私が印象を受けたのだから、この絵の中には印象があるに違いない」。

印象派の画家たちは、単色の細かな筆触に専念し、線描とデッサンを放棄した。彼らは、日の光や時刻に応じて変化する自然には興味を抱いたが、変化しないものは画面から一掃した。自然の変化をより理解するため、光の揺らめきを研究し、屋外でモチーフを描き上げた。

彼らは、明確な理論体系を掲げていたわけではなく、互いに影響し合い変化を与えていった。印象派の画家たちと交遊のあった、ファンタン=ラトゥールのように古典絵画と強くつながった画家もいる。グループの中心的人物であるルノワールも、イタリア旅行を経て古典主義に近づき、独自の様式を発展させた。過去の美術を参照しつつ新たな表現方法を探求した印象派は、それ以降の新しい美術の動向へ多大な影響を与えていたという側面からも、19世紀後半のフランス美術で最も重要な運動であった。

	作家名	作品名	制作年	素材
1	アンリ・ファンタン=ラトゥール (1836-1904)	ヴェーヌスの身繕い	1880	油彩、カンヴァス
2	オーギュスト・ルノワール (1841-1919)	詩人アリス・ヴァリエール=メルツバッハの肖像	1913	油彩、カンヴァス
3	アルマン・ギョーマン (1841-1927)	ポン=マリー、パリ	1883	油彩、カンヴァス
4	ギュスターヴ・カイユボット (1848-1894)	子どものモーリス・ユゴの肖像	1885	油彩、カンヴァス

2. 新印象派

新印象派（あるいは分割主義）という名称は、パレット上では混色せず、細かなタッチを用いる印象派の描法を、科学的な視覚理論から体系づけて発展させた絵画技法から来ている。細かい均一のタッチで純色を併置し、画面から距離を置くことで、混色は観覧者の目の中の“視覚混合”において行われる。これによって色彩の濁りを避け、カンヴァスに輝きを宿すことができた。

新印象派の画家たちは、定期的にアンデパンダン展に出品している。この展覧会は、官展（サロン）に不満を持つ400人ほどの作家たちの提案によって1884年から開催されたもので、何ら審査はなく全ての作家たちに対して開かれていた。第1回展で新印象派の創始者スーラとデュボワ=ピエ、アングラン、クロスら初期メンバーとなる画家たちが出会う。その後すぐに、ロージェやリュス、さらにベルギーからファン・レイセルベルへとレメンが加わった。

1885年から95年にかけて、新印象派の画家たちは、スーラやシニャックの理論を実践するようになる。細かく規則正しいタッチがカンヴァスの平面性を明確にし、奥行き効果を排除していった。さらに、1890年代の半ばに制作された油彩画には、新たな大胆さが見られるようになる。彼らは分割主義の概念を捨て去り、より活気のある力強いタッチを採用したのだ。

	作家名	作品名	制作年	素材
5	アルベール・デュボワ=ピエ (1846-1890)	ポニエールの近くの村	1888	油彩、カンヴァス
6	アルベール・デュボワ=ピエ	冬の風景	1888-89	油彩、カンヴァス
7	シャルル・アングラン (1854-1926)	画家の母の肖像	1885	油彩、カンヴァス
8	シャルル・アングラン	収穫	1887	油彩、カンヴァス
9	アンリ=エドモン・クロス (1856-1910)	遠出する人	1894	油彩、カンヴァス
10	アンリ=エドモン・クロス	糸杉のノクチューン	1896	油彩、カンヴァス
11	マクシミリアン・リュス (1858-1941)	若い女の肖像	1893	油彩、カンヴァス
12	マクシミリアン・リュス	フェイノールのムーズ川	1909	油彩、カンヴァス
13	アシール・ロージェ (1861-1944)	花瓶の花束	1894	油彩、カンヴァス
14	アシール・ロージェ	窓辺	1899	油彩、カンヴァス
15	テオ・ファン・レイセルベルヘ (1862-1926)	ファン・デ・フェルデ夫人と子どもたち	1903	油彩、カンヴァス
16	ジョルジュ・レメン (1865-1916)	ラ・ユルプのフルマリエの家	1888	油彩、カンヴァス
17	ニコラス・アレクサンドロヴィッチ・タルコフ (1871-1930)	ダンス	1904	油彩、カンヴァス
18	ニコラス・アレクサンドロヴィッチ・タルコフ	木陰	1907	油彩、カンヴァス

3. ナビ派とポン=タヴァン派

スーラ、シニャックとその仲間たちが新印象主義に取り組んでいた時、ゴーギャンやベルナルを含む他の画家たちは、より深い芸術の源泉へと回帰するために印象派から離れた。遠近法を拒絶した彼らは、平面的な表現方法を用いた。ゴーギャンは、1886年にブルターニュ地方のポン=タヴァンで孤立していたが、まもなくベルナルら若い画家たちが加わり、ポン=タヴァン派を形成する。彼らは太い輪郭線、平坦な色面で形態を単純化し、画家の感情も画面に取り込むことで主観と客観の総合を目指した。ポン=タヴァン派は1889年のパリ万博で成功を収めた。1880年代末にセリュジエを中心に、当時アカデミー・ジュリアンの生徒であったランソン、ボナル、ヴイヤール、ドニらによって、もう一つの作家グループが結成される。

ゴーギャンの指示のもと1888年にセリュジエが描いた小さな風景画は、メンバーたちから《護符（タリスマン）》と名付けられ、古い慣習から彼らを解放させるインスピレーションを与えた。若い彼らは、新印象派などと区別されるために、預言者を意味する“ナビ”をグループ名に選んだ。ナビ派はアカデミズムに対抗し、写実絵画からの解放を目指した。“聖なるもの”の特質を見出し、魂の新たな跳躍を引き起こそうとしたのだ。ポン=タヴァン派を引き継いだナビ派の芸術は、同時代の音楽やオリエンタリズム、ジャポニスムなどの影響を受けている。

	作家名	作品名	制作年	素材
19	ポール=エリー・ランソン (1864-1909)	海辺の風景	1895	油彩、カンヴァス
20	エミール・ベルナル (1868-1941)	カンカルの浜辺	1886	油彩、カンヴァス
21	モーリス・ドニ (1870-1943)	母子像、アンヌ=マリーの食事	1903	油彩、カンヴァス
22	モーリス・ドニ	休暇中の宿題	1906	油彩、カンヴァス
23	モーリス・ドニ	ペロス=ギレックの海水浴場	1924	油彩、カンヴァス

4. 新印象派からフォーヴィスムまで

地中海沿岸においては、新印象派からフォーヴィスムへの移行がなされ、サン＝トロペで画家たちの新たなグループが結成された。シニャック、クロス、マティス、マンギャン、カモワン、ヴァルタらは共に実験に取り組んでいたが、分割主義が試みられたあと、それぞれの道のりは分岐して行く。シニャックやクロスが筆触分割にとどまったのに対し、マティスの後継者たちは、明快な色彩を選んだ。新印象派とは異なり、色彩によって感情を表現することが最も重要となった。フォーヴィスムは、単純な形態と、大胆な着彩によって特徴づけられる。彼らは、純粹で活気に満ち、激しさも持った色面で勝負しようとした。

マティスが先駆者となったこの運動の名称“フォーヴ”は、1905年のサロン・ドートンヌで、批評家ヴォークセルが激しい色彩の絵画が並ぶ一室を「フォーヴ（野獣）の檻」とたとえたことに由来する。そこにはマティス、ドラク、カモワン、マンギャン、ヴァルタ、ピュイ、デュフィやヴラマンクらが参加していた。なかでも、ヴァルタの影響力は大きく、1895年から翌年にかけて彼が制作した絵画のシリーズは、すでにフォーヴィスムの特色を備えていた。

1907、1908年頃に色彩への情熱が頂点に達してしまうと、古典主義への回帰やキュビスムへの傾倒など、彼らはそれぞれの道へ向かった。

	作家名	作品名	制作年	素材
24	ルイ・ヴァルタ (1869-1952)	帽子を被った女の肖像	1895	油彩、カンヴァス
25	ルイ・ヴァルタ	マキシムにて	1895	油彩、カンヴァス
26	ルイ・ヴァルタ	ブーローニュの森の遊歩道	1898	油彩、カンヴァス
27	アンリ・マンギャン (1874-1949)	室内の裸婦	1905	油彩、カンヴァス
28	アンリ・マンギャン	ヴィルフランシュの道	1913	油彩、カンヴァス
29	モーリス・ド・ヴラマンク (1876-1958)	7月14日 踏切、パリ祭	1925	油彩、カンヴァス
30	ジャン・ピュイ (1876-1960)	画家とそのモデル	1911	油彩、カンヴァス
31	ラウル・デュフィ (1877-1953)	マルセイユの市場	1903	油彩、カンヴァス
32	キース・ヴァン・ドンゲン (1877-1968)	村の広場	1906	油彩、カンヴァス
33	シャルル・カモワン (1879-1965)	海岸の村	1905	油彩、カンヴァス
34	シャルル・カモワン	ナポリの若い女	1906	油彩、カンヴァス
35	シャルル・カモワン	バラ色の布の静物	不詳	油彩、カンヴァス

5. フォーヴィスムからキュビスムまで

フォーヴィスムは色彩や光の研究の成果であった。しかし、画家たちの中には1907年の回顧展をきっかけにセザンヌを再発見した崇拜者たちがいて、空間とボリュームの新たな探究に向かって行った。

ピカソ、ファン・グリス、そしてブラックは、モチーフへの自然主義的なアプローチを拒絶し、この新たな道に踏み込んだ。キュビスムは、対象を多視点で捉えることによって表現力を強め、「現実」の概念を再構築しようとした。古典的な遠近法を放棄し、形態をさまざまな面（ファセット）に分解させた。1907年にピカソが描いた《アヴィニヨンの娘たち》は、キュビスムの誕生を告げている。この運動は、分析的キュビスム（1910-1912）の時期に頂点を迎えた。完全にモチーフが分解するこの時期は、やがて総合的キュビスム（1912-1915）に引き継がれ、色彩と具象性が復活する。そこでは、現実の要素を導入するため、コラージュも試みられた。

1915年から20年の間に、キュビストの何人かは、古典的なテーマへ戻る必要を感じていた。1920年頃になると、その装飾的な傾向から、キュビスムは文学や他の芸術運動の作家たちに接近していった。

ロシアのマレヴナやポーランドのエダンは、形態の再構築と東欧の彩色画の伝統とを結びつけており、キュビスムにおける外国人作家の貢献をよく示している。

	作家名	作品名	制作年	素材
36	ジャンヌ・リジールソー (1870-1956)	白い胸あて	1911	油彩、カンヴァス
37	マリア・ブランシャール (1881-1932)	輪回しをする子ども	1916-18	油彩、カンヴァス
38	マリア・ブランシャール	静物	1917	油彩、カンヴァス
39	アルベール・グレーズ (1881-1953)	座る裸婦	1909	油彩、カンヴァス
40	ジャン・メッツァンジェ (1883-1956)	首飾りを着けた若い女	1911	油彩、カンヴァス
41	ジャン・メッツァンジェ	風景	1913	油彩、カンヴァス
42	ジャン・メッツァンジェ	スフィンクス	1920	油彩、カンヴァス
43	アンリ・エダン (1883-1970)	ラム酒のある静物	1918	油彩、カンヴァス

44	アンドレ・ロート (1885-1962)	バッカント (酒に酔う女)	1910	油彩、カンヴァス
45	アンドレ・ロート	クルティザンヌ	1918	油彩、カンヴァス
46	アンドレ・ロート	ワトーへのオマージュ	1918	油彩、カンヴァス
47	ロジェ・ビシエール (1886-1964)	窓辺の女たち	1920	油彩、カンヴァス
48	ロジェ・ビシエール	台所のビシエール夫人とロート夫人	1921	油彩、カンヴァス
49	マレヴナ (1892-1984)	静物のある大きな自画像	1917	油彩、カンヴァス

6. ポスト印象派とエコール・ド・パリ

印象派、そしてポスト印象派と並び称される新印象派、フォーヴやナビ派の他にもパリでは、前衛芸術を拒絶した様々な作家たちによって、新たな絵画思潮が発展していた。彼らは、パリのありふれた情景を捉え、ときには政治的な視点から描写しようとした。

エコール・ド・パリは、両大戦間のパリで生活し、制作したフランスと国外の作家のグループを表す名称である。それは自由主義の高まりと、フランスの首都の誇り高き芸術精神から発している。そこには美術商や評論家、コレクターなどの活動もつけ加えるべきだろう。日本の藤田、ロシアのシャガール、ポーランドのキスリングらはそこで出会った。作家どうしの意見の交換や対立に加え、それぞれのスタイルの多様性もまた、エコール・ド・パリの重要な特色である。

彼らは異なった文化圏に由来していたため、フランスの印象派にドイツの表現主義を、フォーヴィスムにキュビズムを合体させた。その結果、1920年代のフランス絵画に復活の力を与えることとなった。

また、第一次世界大戦のもたらした深刻な被害と社会不安を受けて、多くの前衛芸術家たちが古典主義に傾倒した。戦間期のヨーロッパに広く見られたこの動向は、“秩序への回帰”という標語で片付けられがちだが、戦後の画家たちにも影響を及ぼしている。

	作家名	作品名	制作年	素材
50	テオフィル=アレクサンドル・スタンラン (1859-1923)	猫と一緒に母と子	1885	油彩、カンヴァス
51	テオフィル=アレクサンドル・スタンラン	2人のパリジェンヌ	1902	油彩、カンヴァス
52	テオフィル=アレクサンドル・スタンラン	純愛	1909	油彩、カンヴァス
53	フェリックス・ヴァロットン (1865-1925)	身繕い	1911	油彩、カンヴァス
54	シュザンヌ・ヴァラドン (1865-1938)	コントラバスを弾く女	1908	油彩、カンヴァス
55	シュザンヌ・ヴァラドン	暴かれた未来、あるいはカード占いの女	1912	油彩、カンヴァス
56	ジョルジュ・ボッティーニ (1874-1907)	バーで待つサラ・ベルナールの肖像	1907	油彩、カンヴァス
57	ジョルジュ・ボッティーニ	フォーリー・ベルジェールのバー・カウンター	1907	油彩、カンヴァス
58	アンドレ・ドラム (1880-1954)	横たわる金髪の裸婦	1934-39	油彩、カンヴァス
59	モーリス・ユトリロ (1883-1955)	ノートル=ダム	1917	油彩、カンヴァス
60	モーリス・ユトリロ	ヴィルフランシュの通り	1921	油彩、カンヴァス
61	藤田嗣治 (1886-1968)	2人の小さな友だち	1918	油彩、カンヴァス
62	モイズ・キスリング (1891-1953)	ルシヨンの風景	1913	油彩、カンヴァス
63	モイズ・キスリング	緑の背景のレモンのある静物	1916	油彩、カンヴァス
64	モイズ・キスリング	サン=トロペのシエスタ	1916	油彩、カンヴァス
65	モイズ・キスリング	赤毛の女	1929	油彩、カンヴァス



ご観覧ありがとうございました。
またのご来館をお待ちしております。

